

アドバイザー派遣事業実施レポート

- 1 研修テーマ 「一人一人の社会参加につながる生きる力を育む授業づくり」
- 2 研修団体 鳥取県肢体不自由教育研究会
- 3 実施期日 平成 27 年 7 月 15 日（水） 10:50～16:55
- 4 実施場所 鳥取県立鳥取養護学校
- 5 アドバイザー 島根大学教育学部准教授 樋口和彦氏

6 研修の内容

(1) 学習参観

- ① 中学部重複Ⅱ型 1年 自立活動（課題学習）
- ② 高等部ふれあいコース 2年 自立活動（課題学習）
- ③ 小学部重複Ⅱ型 2年 自立活動（課題学習）
- ④ 小学部重複Ⅱ型 4年 合わせた指導（おはなし）

(2) 指導助言の内容

- ① 学習の中で生徒が行っている活動は、本人にとってどんな意味があるか考え、実際の場面に置き換えて行う方がよい。好きなものと活動が結びつくといよい。やりとりが必要な場面を意図的に作る。姿勢や手の動きは、PT等と相談しながら検討していく。
- ② 教師とのやりとりを多く設定していく。反応に対する応答ができる。読み聞かせも生徒の反応を待ち、リズムを変えるなどして応答を引き出し答えていく。1対1の学習の中で、とことんやりとりをし、関係ができてから次の課題に取り組む。
- ③ 豆を扱った教材であったが、豆の台を黒くする、匂いを付ける等、工夫の余地は大きい。「口をもぐもぐ」の反応に対する意味づけをする。もぐもぐしたらすぐに口に触れるなど、即時応答して頻繁なやりとりを行い、教師とのやりとりの実感が持てるようにする。
- ④ 机上でできたことが通常の場合で使えるよう、設定を工夫する。生活の中での楽しみにもつながるよう、じっくりと取り組むことができるようにする。人と人との関係性を大切に、日常生活の指導の場面のできることは、その時間を活用して行う。

(3) 講義「重度・重複障がいの児童生徒の社会参加につながる授業づくり」

- ・子どもは、自分が信頼できる誰かがいないと力を発揮しない。困ったときに足場となってくれる存在が必要である。
- ・自立活動は、集団で指導することを前提としていない。個々の目標を達成するために有効な環境や指導の工夫が必要である。
- ・子どもは自分の行動への応答性がある人を求めている。子どもの興味関心を探り、そこに教師が入って動きに応える。応答すると子どもからかえってきて、やりとり・学習が生まれる。
- ・短期でクリアできる目標設定を行う。教科の目標も取り入れる。（小下学年）
- ・子どもが本来の学習の意味が分かるよう、目標にそったとき褒める、保護者にも伝えていく。
- ・得た知識を活用できるよう努める。それが必要で、求められる場所で学ばないと力にならない。机上での学習を日常生活場面に広げる。机上で学習していることは、生活に役立つという前提で学習を進める。

7 まとめ

前半は実際の授業を通して指導助言を受け、重度・重複障がいの児童生徒の授業において大切な人との関係性を、具体的な場面や例を通してわかりやすく説明を受けた。引き続き授業のカンファレンスを行い、授業づくりへの工夫を行っていききたい。また、「重度・重複障がいの児童生徒の社会参加につながる授業づくり」の講義を聞き、キャリア教育の視点を取り入れることや、子どもの学びについて知識を深めることができた。児童生徒の今の生活が豊かになるよう、そしてそれが将来の力とつながっていくことができるよう、この研修を生かして、今後も授業づくりについて検討し、実践を深めていきたい。